

# 水戸学に自由の伝統を発掘

吉田俊純著

## 『水戸学の研究——明治維新史の再検討』

(明石書店、二〇一六年五月)

平山 朝治

本書は、一九八六年に出版された『後期水戸学研究序説

——明治維新史の再検討』(本邦書籍)の増補復刻版である。

著者の吉田俊純・筑波学院大学名誉教授は、東京教育大学(現筑波大学)大学院修士課程を終了後、茨城県立歴史館で近世史料担当に就職して、修士論文を書き直した「後期水戸学と奇兵隊諸隊」(本書Ⅱ部三章)を『茨城県歴史館報』(第二号、一九七五年)に発表し、さらに、水戸藩の水戸より南の地域の経済発展と水戸学とのかかわりを解明するという、地の利を生かした緻密な実証研究を基礎に、戦後歴史学における水戸学の通説的評価を覆し、茨城のみなら

ず日本の近世・近代史に新たな展望を切り拓く画期的な研究を積み重ねてきた。

丸山真男や遠山茂樹らに代表される戦後の通説においては、水戸学は封建体制を支えるものとされ、吉田松陰を精神的リーダーとし、農民を組織した長州藩の奇兵隊に象徴されるような、封建的身分の枠を打ち破る動きによって水戸学は乗り越えられ、明治維新が実現したとされてきた。それに対して本書によれば、水戸藩南部の農村における商品経済の発展とともに台頭した豪農層の政治意識が、水戸学を学ぶことを通じて高まり、彼らが水戸藩の改革を支えた。このように、水戸学は水戸藩の政治・軍政改革を実現

し、長州をはじめとする倒幕諸藩の模範となるような思想であったことを著者は実証し、水戸学は明治維新において重要な積極的役割を果たしたことを明らかにした。

通説において水戸学は、会沢正志斎の『新論』を典型とする、民衆に不信感を抱く反商品経済的な封建教学と性格付けられていた。著者は以下のようにこの通説を批判する。

小宮楓軒は一七九九年以降二〇年以上郡奉行を勤めてその土地にあった大量消費される商品作物の生産や金融の発展を促す政策を実行し、郷校を設立するなど、農村復興で成果を挙げ、水戸藩天保改革（一八二九～四四年）で重用された。豪農層との接触とともに水戸学は変質した。本居

宣長の国学を取り入れることで日本の風俗のよさを認めて民衆を信頼し、非合理的な古典に記された古代を理想としてその後の歴史を幕藩体制まで含めて批判的にとらえる藤田東湖の思想が、民衆のエネルギーを吸収して倒幕と明治維新に至る流れを作り出した。水戸中学校の校長として欧米を視察し、自主性を重んじる自由主義教育を推進して免職させられたあと無所属で衆議院に当選し、水戸における大正デモクラシーの象徴的存在となった菊池謙次郎らによる、戦前の水戸学論は、東湖論であった。戦後の歴史学が東湖を避けたのは国学に由来する非合理的な神道の側面を等閑視したためではないかと著者は論じ、幕末維新史研究

の課題として水戸学や松陰の非合理的・宗教的側面の解明を挙げている。

戦後の通説が水戸学を封建思想とし、それを乗りこえたものが長州の松陰と奇兵隊であるとすることを批判し、商品経済の発展とともに民衆を信頼する東湖の思想が形成されて明治維新を導いたとする著者の主張は、かつてのマルクス主義における講座派と労農派の対立を彷彿とさせる。講座派は明治維新を上からの絶対主義的改革と見るのに対して、労農派は不完全ながらも市民革命ととらえており、通説は講座派的、著者は労農派的だという第一印象を私は抱いた。

コミンテルンの『日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ（三二年テーゼ）』は、明治維新以後の天皇制を絶対主義ととらえ、ロシア革命をモデルとして、絶対主義的君主制を打倒するブルジョア革命に続けて一党独裁を確立する社会主義革命を目指すべきだとした。これはロシアにおける反ツァーリスムの広範な連合によってそれを倒した上で、競合する諸勢力を殲滅して一党独裁を確立するというレーニンの戦略を正統化する理論であるが、一君万民を前提とした民本主義が大正デモクラシーを導いた日本において、天皇制を打倒するという目標は諸勢力の広範な支持を得られるものではなかった。にもかかわらず、

コミンテルンに忠実な人たちが三二年テーゼによる歴史観として講座派を立ち上げたのであるから、講座派は最初から、戦略的にも事実認識としても日本の実情とはかけ離れていたのではなからうか。

発展途上の資本主義を否定して一気に社会主義へと移行しようとする、ロシア革命をモデルとする講座派的発想は、商品経済が持つ可能性を実際以上に低く見積もりがちである。明治維新は市民革命ではなく絶対主義的改革であるとし、水戸学が農村における商品経済の発展とともに変容したことを見過ごして封建思想であるとするのもその例と言えるのではなからうか。農村の商品経済化を抑圧しようとした点で封建教学と農業集団化をめざしたソ連・講座派とは一致しており、講座派の影響を強く受けた通説は自分に似た面しか水戸学に見ることができなかったと皮肉ることもできるのではなからうか。

それに対して山川均らの労農派は大衆から遊離した少数精鋭の前衛党によるテロルや独裁を非とし、東湖の水戸学と同じく民衆を信頼し、大衆を高めつつ合法的に彼らと共に進むことを基本とした。多数の大衆の支持を得れば合法的に政権を獲得できるのであるから、彼らが国会で勢力を伸ばせばマルクス主義的な革命路線から離れ、社会民主主義化していくはずだったとみることができらるだろう。しか

し、山川のあとを襲って労農派の指導者となった向坂逸郎とその一門や彼が指導する社会党左派は、六〇年代後半にはソ連との結びつきを深め、一九六八年のプラハの春や一九七九年のアフガニスタン侵攻ではソ連を支持したのであり、山川らは草葉の陰で嘆いていたのではなからうか。

ロシア革命の影響を受けた社会思想は総じて、資本主義ないし市場経済の役割を経済理論においても経済史においても過小評価して、全体主義的な権力・暴力によってそれを破壊しつつ社会を造りかえることが可能であり望ましくもあるとし、多数のクラーク（原意は自営農だが富裕層で反革命的だというレットル）をシベリア送りにして農業集団化を進め、数百万人が餓死するに至った。マルクス主義はソ連のみならず、中国、北朝鮮、カンボジアなど、政権を獲得した世界各国で約一億人もの人々の命を奪い、生き残った人々を苦しめ続けてきた（クルトワほか、外川継男訳『共産主義黒書（ソ連篇）』、高橋武智訳『共産主義黒書（アジア編）』ちくま学芸文庫、二〇一六・七年）。マルクス主義が日本を支配すれば同様の悲劇をもたらしていたと思われ、ナチズムや戦前日本のファシズムの非人道性はそれと比べれば軽微だと言わざるをえまい。戦前日本の全体主義を問題にするためには、まず、左の全体主義が犯した史上類例のない犯罪の責任を明らかにすべきだろう。日本に

おける全体主義化の流れはロシア革命以後のマルクス主義の影響にはじまり、北一輝や革新官僚などにみられる右の全体主義的思想もマルクス主義の上記のような発想を無批判に受け入れており、明確な相違点は天皇制を批判するか擁護するかにか見出せないのではなからうか。

講座派の発想が絶対主義天皇制の打倒を二段階革命の第一段階とするのに対して、労農派の発想は天皇制とブルジョワ社会とは両立可能とすることで、社会主義と天皇制も両立可能だと見ていることになる。そのような見方が日本のマルクス主義の主流となっていたならば、それと北一輝や革新官僚との間の思想の違いもはつきりしなくなり、左と右の全体主義が競い合って過激化するようなこともなく、大正デモクラシーの延長上に日本型社会民主主義とも言えるものが形成されていたかもしれない。

ところで、労農派の淵源は、マルクス主義・マルクス経済学ではなく、福田徳三がミュンヘン大学に卒業論文として提出してその年のうちに出版された *Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan*, Stuttgart, Cotta, 1900 (福田自訳「日本経済史論」『経済学全集 第三集 経済史経済学史研究』同文館、一九二五年) であり(金沢幾子『福田徳三著作年譜』<http://fukudalhbhit-u.ac.jp/person/fukuda/kanazawa/chosakumenpu.html>)、そ

福田は日本の経済発展を、原始時代・帝権拡張時代・封建時代・専制的警察国家の時代・今日の日本の五段階とし、第四段階の徳川時代は西洋における絶対主義期にあたるとした。

福田は同書の最終章「今日の日本」で、明治維新の諸改革にもかかわらず当時の日本を支配しているのは士族であり、伝統的な家族制度の習慣的持続も強固であることを指摘しているが、これも、重化学工業化においては世界のトップを走っていた当時のドイツにおけるユニカーの存続や、日本と似た直系家族の家父長的権威の強固な持続を踏まえ、日独の類似を指摘したものと見える。著者の労農派的立場も、マルクス主義的歴史観と切り離し、福田経済史の延長上に位置づけると、その意義にも新しい光を当てることができるのではなからうか。

福田は講座派が言うところの封建遺制論のように、士族支配や伝統的家族制度の存続を時代遅れのものの残存とみなしているわけではない。むしろ、経済発展にもかかわらず家族制度など社会を支える慣習は一朝一夕には変わらないということを一一般論として主張し、そのような観点から明治の日本の特色を描いているように思われる。これは、東湖が国学に従って日本古来の風俗に着目したことに通じるのではなからうか。

経済発展と家族制度の関係については、従来、大家族から核家族への変化の法則があるとされてきたが、エマニュエル・トッドらによる最近の研究（トッド、石崎ほか訳『家族システムの起源 上下』藤原書店、二〇一六年など）はそれと正反対の説が正しいことを示した。すなわち、核家族が人類史上最初の家族であり、複数の核家族が合わさって、一世代一夫婦の直系家族や、親夫婦とその子である兄弟たちの夫婦が同居する共同体家族が形成されたとみるべきだとされる。ユーラシア大陸中央部においては共同体家族が優勢であり、ロシアや中国においてマルクス主義が強い影響力を発揮したのは、権威と平等を重視する点で共同体家族の価値観がマルクス主義と通底しているためであり、ドイツと日本が似ているのは両者に共通する直系家族が育む権威と不平等の価値観に由来し、イギリスやフランスで自由主義が強いのはそれらの中心地帯で核家族を超える家族制度が伝統的に存在しないためであるという風に、伝統的な家族制度が諸社会の風俗の特質を根本的に規定している。このようなトッドらの研究は、日本の国学が着目した風俗の根源を家族制度に見出し、家族制度の類型による比較風俗史として日本中心主義的な国学を普遍化する手がかりを与えていると言えるだろう。

自由・平等・博愛を掲げたフランス革命はトッドの説く

ように平等主義的核家族の価値観を反映しているのであり（トッド、石崎訳『新ヨーロッパ大全ⅠⅡ』一九九二年、藤原書店、第八章）、それを典型として明治維新は不完全な市民革命などと見る立場はフランス中心主義と批判されなければなるまい。

産業化・都市化とともに直系家族や共同体家族はそれらを構成する基本単位である核家族に分解する傾向がみられ、近年の先進国においては核家族規範すら崩壊し、非婚や婚外子が珍しくなくなっているが、それにもかかわらず、伝統的な核家族、直系家族や共同体家族が育んできた価値観はなかなか弱まらず、長期にわたって持続して人々の意識や社会のあり方にさまざまな影響を与える。

このように家族制度に着目すれば、国学の影響を受けた東湖が重視した古来の風俗を無批判に絶対化することなく、うまくとらえられるのではなからうか。父から跡取り息子へと代々継承され、永続することを目指すイエという日本独特の家族・家業経営体は、藤原道長以降の摂関家として歴史に登場し、律令官僚制の官職が世襲請負化して公務と営利的私的経営とが一体化した家職の技能や家産を代々受け継ぐイエからなる分業社会のシステムが京都の貴族たちの間にでき、このシステムは南北朝室町期には武士、戦国時代には惣村自治とセットで畿内農村に広がった（拙著『イ

工社会と個人主義——日本型組織原理の再検討』日本経済新聞社、一九九五年)。貴族たちの都市型分業社会として生まれたイ工社会は商品経済の発展を促した。地方の中下層まで含めて多くの家族が自らをイエと意識するようになるのは、一八世紀後半から一九世紀初頭にかけてであり(長谷部弘『『家』を比較研究するための覚え書き——経済史研究の視点から』東北学院大学『経済学論集』第一七七号、二〇一一年)、一八世紀後半の商業・海運の発達で日本列島各地が市場経済活動に巻き込まれたことがその背景にある(國方敬司ほか編著『家の存続戦略と婚姻——日本・アジア・ヨーロッパ』刀水書房、二〇〇九年)。このように日本独特のイエは都市的分業社会に適した家族・家業経営体の組織原理として生まれ、宣長が活躍した一八世紀後半の市場経済の発達とともに日本全国・全階層に広まったのであり、国学はそれを古来からの醇風美俗と結びつけた。

水戸藩においては、一七八三年のアイスランド火山の大噴火や浅間山大噴火にはじまる天明の大飢饉とその後の天候不順からの復興が一九世紀はじめから、周辺諸地域に比べて三〇年も早く始まったと著者は指摘している(本書五三頁)。したがって、国学の影響を強く受けた東湖の思想は、一九世紀初頭において水戸藩の商品経済の発展を担う豪農層が自分たちのイエを単位とする新たな社会秩序を

形成する際、その指導理念とされたのであり、日本全体をみわたしても大消費都市江戸近在の経済的先進地域に普及した最も先端的な思想であったとみることができる。

国学によって絶対化された記紀神話は、『古事記』と『日本書紀』正文および諸書という、相互に矛盾する複数のテキストからなるので、日本における自由主義の古典と位置づけることができ(拙著「日本神話にみる自由主義のなりたち」『筑波大学経済学論集』六四号、二〇一二年、<http://doi.org/10.15068/00137540>)、『古事記』と『日本書紀』正文は天皇家の始祖を太陽女神アマテラスとするが、その弟のスサノオであるとすも説も政府公定の六国史劈頭に位置する『日本書紀』に収録されている(神代紀第六段一書第一および第三、同第七段一書第三)。このように、皇祖神という王権神話のなかで最も重要な神が誰であるかに関してすら、単一のテキストを正統と定め、他を異端として抑圧するような専制的権力は存在せず、多様な説の共存を許容するような言論空間が古代の支配層内部において成立していたことになる。

他方、『古事記』と『日本書紀』はいずれも、初代神武から第一三代成務までの皇位は父子直系で継承されたとしている。文武からその子聖武への皇位継承をめざしていた時期に記紀が編纂されたので、この直系系譜は聖武を正統

な継承者とするための規範の確立という意味を當時は持っていたが、東湖らの水戸学においては、天皇家を総本家とし、始祖たる親から直系子孫へと継承されるイエの集合体として日本国家をとらえ、世界全体を天皇中心の秩序に編成しようとするような国学的国家観・世界観の絶対的な規範としての意味を持ったと思われる。その思想の標語としてもはやされたのが幕末期の尊王攘夷であり、戦前期の八紘一宇（世界中が一つ屋根の下）である。

トッドによれば、跡取りの一子やその配偶者と、それ以外の子とを厳しく差別する直系家族の価値観は、自民族中心主義を育み支えるものであり、日本においては商品経済の発達とともに社会全体にイエが広まっていた一九世紀に對外的危機の深刻化とともに尊王攘夷運動が高まり、幕藩体制を廢して天皇中心の強力な国民国家を形成し、欧米列強に伍すという目標に全国民（当時の言い方では臣民）を駆り立てた。

東湖の思想は、そのような運動へと多数の人々を誘ったが、それは全体主義的な体制を必然的に帰結するものではなく、著者が指摘するように自由民権運動や大正デモクラシーにもつながるものだったことは、水戸学の名譽のためにも改めて明記しておく必要があるだろう。東湖は大勢順応とは正反対の人であり、日本的集団主義の聖典とされる

『十七条憲法』第一の「和を以て貴しと為し、忤<sup>なを</sup>うこと無きを宗とせよ」とは正反対に、水戸学の教育は「不敬・不和になろうとも、自説を曲げずに行動する主体的な人格」（本書二九四～五頁）をもたらずと説いて、「各人が積極的に天下国家の大事に、主体的に関与することを求め」（同二四八頁）た。福田も日本の家族制度は容易に分家を創出できるので、資本主義・市場経済と適合的であると指摘している（自訳三一頁）。マルクス主義が広まりやすい共同体家族の社会と比べて、自由主義・個人主義との矛盾は少なく、自由主義・個人主義と全体主義・集団主義のいずれに社会が傾くかは時代状況などに応じて大きく振幅しえるという特色が、ドイツや日本など、直系家族が支配的な社会にはみられるのではなからうか。なお、日本では核家族を基本とする別居隠居がみられる地域がかなりあることが、自由主義・個人主義の根強さを支えていると思われる。

日本における自由主義・個人主義の伝統は専制的権力の欠如によって記紀編纂時の言論空間に生まれ、江戸時代においては仁齋や徂徠の私塾にはじまる自由討論によるテキニスト解釈法の普及とともに、儒学のみならず国学や蘭学にも広まり、水戸学や水戸藩の政治の発展もそのような自由な言論空間を伴っていた（前田勉『江戸の読書会』平凡社選書、二〇二二年）。なお、前田は『新論』の尊王攘夷を、『孫

氏』に従って意図的に絶体絶命の「死地」にひきずりこみ、分裂した民心を統合する策とし、通説の正志齋理解を批判している。前田によれば『新論』は商品経済の発展とともに困窮化した中下層武士に好まれたのであるから、豪農層に支持された東湖の思想と補完的なものであった。

このようにとらえることができるとすれば、以下のように戦前の歴史の流れを概括できるだろう。記紀神話に始まる自由主義は一八世紀後半以降、支配層だけでなく全国民の間に広く普及してきたが、大正デモクラシーの高まりと並行して、ロシア革命の影響を受けた左右全体主義の思想や運動もさかんになり、日本は一九二五年の普通選挙法成立の後、急速に全体主義・集団主義化した。左が先行し、右はそれに対抗したので、ソ連の影響を強く受けたマルクス主義こそが、戦前の全体主義や今日まで日本社会を特色づけるとされがちな集団主義の責任を主に負わなければならないと思われる。

幸徳秋水や堺利彦ら社会主義者たちと親しかった演歌師の添田唾蟬坊は、「こはいおちさんレニン、トロッキー」（唾蟬坊・赤春作詞・唾蟬坊曲）「新馬鹿の唄（ハテナソング）」（一九二〇年）と唄い、『船頭小唄』（野口雨情詞・中山晋平曲、一九二三年、原題『枯れ芒』<sup>すすも</sup>一九二一年）以降、ヨナ抜き短音階の暗い歌が流行歌の主流となった。この日本音

楽史上例のない湿っぽく暗い音階は日本型個人主義・自由主義の衰微を表現しているように思われてならない。ちなみに、堺は一九二二年日本共産党結党に参加したが、山川とともに解党論を唱えて二四年の解党後はコミンテルンの指導による共産党再建に参加せず、山川らと労農派を作った。

福田やトッドを参照しつつ著者の水戸学論を私なりに発展させると、諸民族の家族制度の多様性をふまえて日本のイエ制度の特色を把握することを通して水戸学に取り入れられた国学の意義と限界を押さえたうえで、日本における自由主義・個人主義的伝統の幕末から戦前にかけてのリーダーとして東湖風水戸学を位置づけることができるように思われる。